

「測量の日」における功労者感謝状贈呈対象者及び贈呈理由

今年度は、以下の個人4名、団体4者の方々に感謝状を贈呈します。

(五十音順 敬称略)

【個人】

◆江端 益子 (あこう絵マップコンクール実行委員会 事務局)

江端益子氏は、兵庫県赤穂市で平成15年から開催されている「あこう絵マップコンクール」の実行委員長や事務局などで運営に携わってきた。

「あこう絵マップコンクール」は、子供たちが自分たちの住むまち「赤穂」を探検し、まちの人たちへの取材やまちなみ・歴史などを調べることを行い、その感性や創意工夫を生かした絵マップを作ることを通じて、子供も大人も「赤穂」の魅力を見直し、郷土愛を育成し、まちづくり意識を醸成することを目的として毎年開催されており、令和4年に第20回の節目を迎えた。

同コンクールの実行委員会は、趣旨に賛同するさまざまな市民による協働・ボランティアで運営されており、手づくりのコンクールとして地域社会に支えられている。

江端氏は初回から20年にわたり、一貫して運営の中心的役割を担われており、地域における地理・地図教育の発展に多大なる功績をあげられた。

◆後藤 光亀 (貞山・北上・東名運河研究会 代表世話人、東北土木遺産研究所 所長、野蒜塾 代表)

後藤光亀氏は、2017年まで東北大学准教授をつとめ、現在まで「野蒜築港や貞山・北上・東名運河の復興再生ならびに水質・生態系・景観保全の調査研究」、「水と砂が織りなす地形・地名と防災教育への教材開発」、「東北地方の土木遺産の顕彰と地域づくり」等に取り組んでいる。

令和2年(2020年)から宮城県仙台二華中学校・高等学校の行事「北上川フィールドワーク」において東松島市野蒜地区の野蒜海岸・洲崎湿地にて100名程度の生徒と一緒に環境研究活動を毎年継続して行っている。野蒜海岸・洲崎湿地では、東日本大震災後の外来種の植物分布や水質などを調査し、ウェブ地図「地理院地図」を使用した地形の見える化などを生徒へ指導している。また後藤氏は、東松島市野蒜地区に会場を設けて、生徒がこうした成果を発表できる機会を与えている。

また、「北上川フィールドワーク」に協力している野蒜塾関係者や東松島市職員をはじめ、石巻工業高校の生徒と教員、七北田川の仙台市田子地区の地元住民と小中高校教員を対象に、地理院地図の活用方法や使い方を学べる講座を開催している。また、2020年6月、日本河川協会の月刊誌「河川」や、2020年から東松島市の野蒜まちづくり協議会の月刊広報誌「ひびきあい」(8町内会970戸全戸配布)にも継続的に、地形の成り立ちと防災の観点から「地理院地図」の利活用を紹介している。

こうした活動は地域内での学習支援ができる持続可能な人材育成につながることから、地理空間情報の普及・啓発で多大に貢献されており、その功績は大きい。

◆^{たけむら}武村 ^{まさゆき}雅之（名古屋大学減災連携研究センター特任教授）

武村雅之氏は、長年にわたり地震と災害との関係について研究・調査を行い、特に大正関東地震によって引き起こされた関東大震災について造詣が深い地震学者である。

関東大震災関連では、『関東大震災を歩く 現代に生きる災害の記憶』（吉川弘文館）、『復興百年誌：石碑が語る関東大震災』（鹿島出版会）など多数の書籍や研究論文を執筆している。また、災害でもたらされた被害を伝える石碑などの調査には、およそ 20 年前から取り組み、東京都 23 区等と神奈川県全域について、現地調査を行い関東大震災関連の碑文に記された内容や由緒等をまとめた報告書をまとめている。その報告書は、地域の防災減災対策や自然災害伝承碑の基礎資料等として、各方面で利用されており、顕著な功績である。

さらに、近年は新聞（関東大震災 学ぶべき教訓；朝日新聞デジタル）への寄稿やテレビ（明日をまもるナビ；NHK）への出演などを通じ、積極的に防災減災の情報発信も行っている。

これらの取組は、社会における地理的観点からの防災意識の向上と防災や地理教育の普及・啓発に多大な貢献をしている。

◆^{みたに}三谷 ^{やすひろ}泰浩（九州大学大学院工学研究院附属アジア防災研究センター教授、
東京大学空間情報科学研究センター及び大分大学客員教員）

三谷泰浩氏は、地域の産学官の間で地理空間情報に係る課題認識や情報共有を目的として平成 21 年度に設置した「地理空間情報の活用推進に関する九州地方産学官連絡協議会」の発足に尽力されたとともに、平成 29 年度から座長を務めるなど同連絡協議会の運営に多大な貢献をされている。また、地理空間情報に関する研究会として「GIS 基礎技術研究会」を開催するなど、九州地域における地理空間情報の普及・利活用促進に多大な貢献をされている。

また、平成 29 年 7 月九州北部豪雨災害において、「九州大学災害調査・復旧・復興支援団」を組織し、団長として被災地に入り、復旧活動の支援や災害の原因究明、行政への復旧対策へのアドバイス等を行い、被災地での地区防災マップやタイムラインを活用した地区防災計画を策定した。さらに、災害の記録を後世に伝えるため、「東峰村災害伝承館」の設立・運営に尽力し、被災地の復興に向けた活動を通じ、各地の地域防災・減災活動にも貢献されている。

地理空間情報の普及・利活用促進に資する功績に加えて、各地の地域防災・減災活動にも尽力するなど、測量行政の発展への功績は多大である。

【 団 体 】

◆^{むらやま}茨城大学教育学部社会科教育教室（代表 ^{ともこ}村山 朝子）

茨城大学教育学部社会科教育教室は、地図作品づくりを通して茨城県の小学生、中学生が身の周りの環境や地域への関心、理解を深める活動の一環として、「いばらき児童生徒地図研究会」が毎年開催している「いばらき児童生徒地図作品展」の開催に平成 27 年から協力している。茨城大学を会場として作品展の設営、会場管理を行い、表彰式は企画から準備、当日の運営までを担当し、受賞者とともに作品を紹介するなど、毎年工夫を凝らした構成が好評である。また、最近では、作品展や表彰式の様子をまとめた動画の作成も行い、作品展を通じた社会一般に対する広報に貢献している。これらは幅広く地図や地理教育の普及・啓発を行うものであり、その功績は極めて大きい。

◆彩の川研究会（会長 ^{ほら} 原 ^{まさあき} 正明）

彩の川研究会は、平成 11 年度から埼玉県を中心に、川に関わる知識と経験が豊富な会員の能力を活用し、発足当初から河川と人・自然・歴史と関わりなどについての調査研究や各種河川施設の学習、現地研修会等を行っている団体である。

調査研究は、地域の地理や歴史に関する内容も多く、特に過去の災害教訓を伝える石碑・碑文の調査においては、早くから取り組み、平成 16・17 年度の「碑文に見る川の歴史」や平成 28 年度の「我が町の災害アーカイブス」において数多くの石碑・碑文が報告されている。現在、その一部は自然災害伝承碑としても公開されている。

また、調査研究報告書は、県内の公立図書館や国・県の関係行政機関等に寄贈され、各機関の HP からも紹介されるなど、地理教育の普及・啓発のためにも貢献されている。

これらの取組は、地域住民の自然災害への防災意識を高めるとともに、社会における防災や地理教育の普及・啓発に多大な貢献をしている。

◆地理×女子（お茶の水女子大学）（部長 ^{ふたまた} 二俣 ^{はるか} 陽香）

地理×女子（お茶の水女子大学）は、月刊「地理」2016年3月増刊「地理×女子=新しいまちあるき」（古今書院）を執筆するにあたり、活動を開始したグループである。

書籍の執筆後、Geoアクティビティコンテスト（G空間EXPO2021、G空間EXPO2022）への参加、地球惑星科学連合大会での発表、アーバンデータチャレンジ2022での銀賞受賞、テレビ（タモリ倶楽部；テレビ朝日）、ラジオ（クロノス；TOKYO FM）（渋谷の工事；渋谷のラジオ）への出演、日本経済新聞や毎日新聞等へ掲載された。

さらに、学園祭でのまちあるきや地理カフェ企画、「ひらめき☆ときめきサイエンス」にて女子高生対象のまちあるきの活動、TwitterやFacebookでの発信など、定期的な活動を行い、積極的に地理、地形、地図などに関する情報発信を行っている。

また、地図を使った文房具「OCHAMAP」企画や「ご当地グルメの地理学」の執筆なども行っている。

これらの取組は、若い世代に地理や地図に関心を持たせるとともに社会における地理の教育や地図の普及・啓発に多大な貢献をしている。

◆リンテック株式会社（代表取締役社長 ^{はっとり} 服部 ^{まこと} 真）

明治以来、地図用紙は印刷局で抄造されていたが、昭和 40 年度に打ち切りとなった。これを受け、昭和 41 年度からは四国製紙株式会社（現在のリンテック株式会社）で抄造されるようになった。地図用紙は、地図の使用目的上、高度な耐用性が求められ、紙幣と同様に高度な偽造防止技術等、抄造には高度な技術、品質管理が求められる。現在まで多年にわたり、国土地理院の地図用紙を抄造し続けたのは当社のみであり、地形図等の普及及び流通に大きく貢献した。この功績は、極めて大きい。